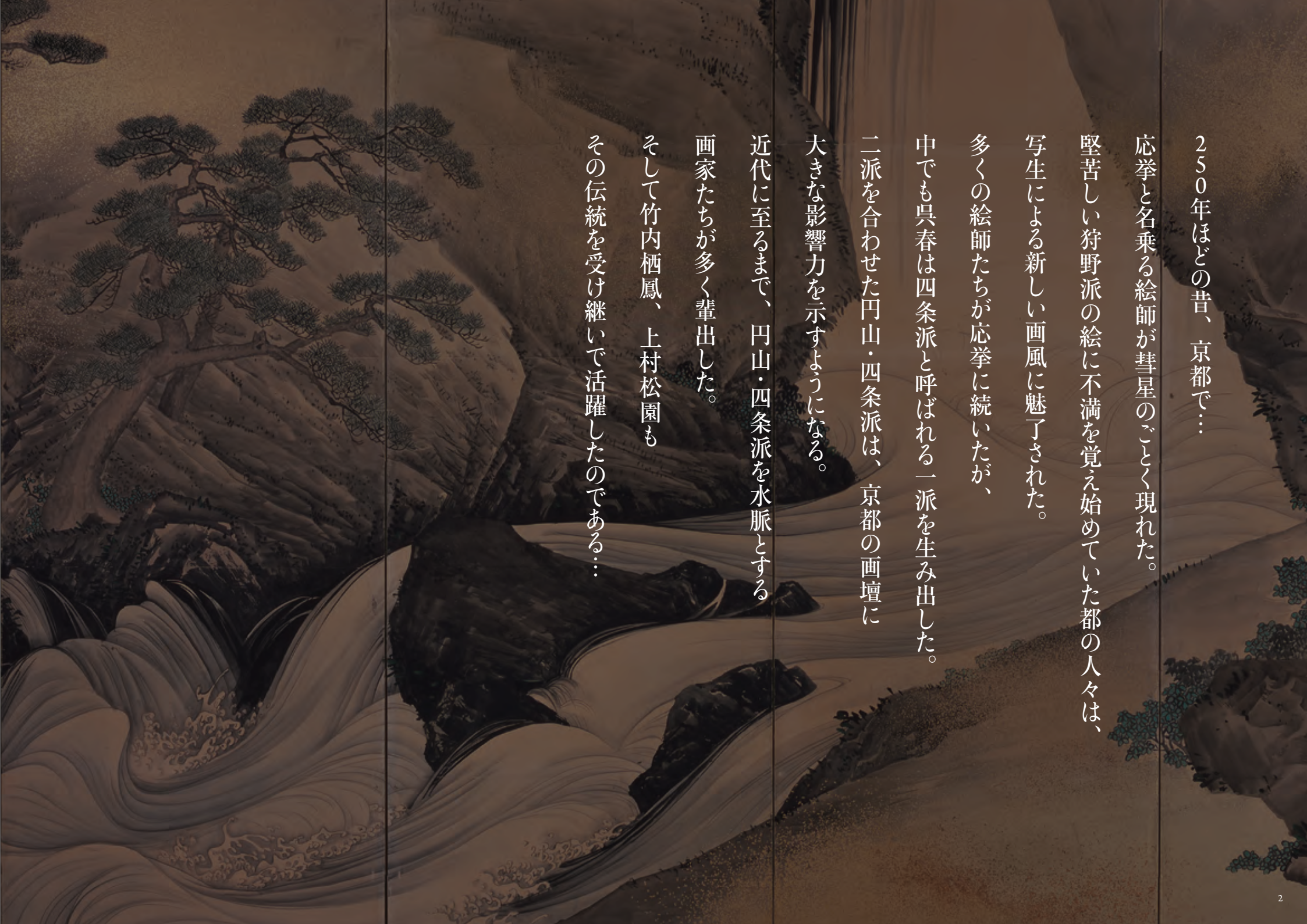
円山応挙から近代京都画壇へ

PRESS RELEASE　報道用資料

応挙、呉春を起点として、
近世から近代へと連なる
画家たちの系譜を一挙にたどる、
円山・四条派のすべて。

LEGENDARY KYOTO PAINTING FROM MARUYAMA OKYO TO THE MODERN ERA



２５０年ほどの昔、京都で…

応挙と名乗る絵師が彗星のごとく現れた。

堅苦しい狩野派の絵に不満を覚え始めていた都の人々は、

写生による新しい画風に魅了された。

多くの絵師たちが応挙に続いたが、

中でも呉春は四条派と呼ばれる一派を生み出した。

二派を合わせた円山・四条派は、京都の画壇に

大きな影響力を示すようになる。

近代に至るまで、円山・四条派を水脈とする

画家たちが多く輩出した。

そして竹内栖鳳、上村松園も

その伝統を受け継いで活躍したのである…

開催趣旨

18世紀、様々な流派が百花繚乱のごとく咲き乱れる京都で、円山応挙は写生画で一世を風靡し円山派を確立しました。また、与謝蕪村に学び応挙にも師事した呉春によって四条派が興り、写生画に瀟洒な情趣を加味して新たな一派が誕生します。この二派は円山・四条派としてその後の京都の主流となり、近代にいたるまで京都画壇に大きな影響を及ぼしました。

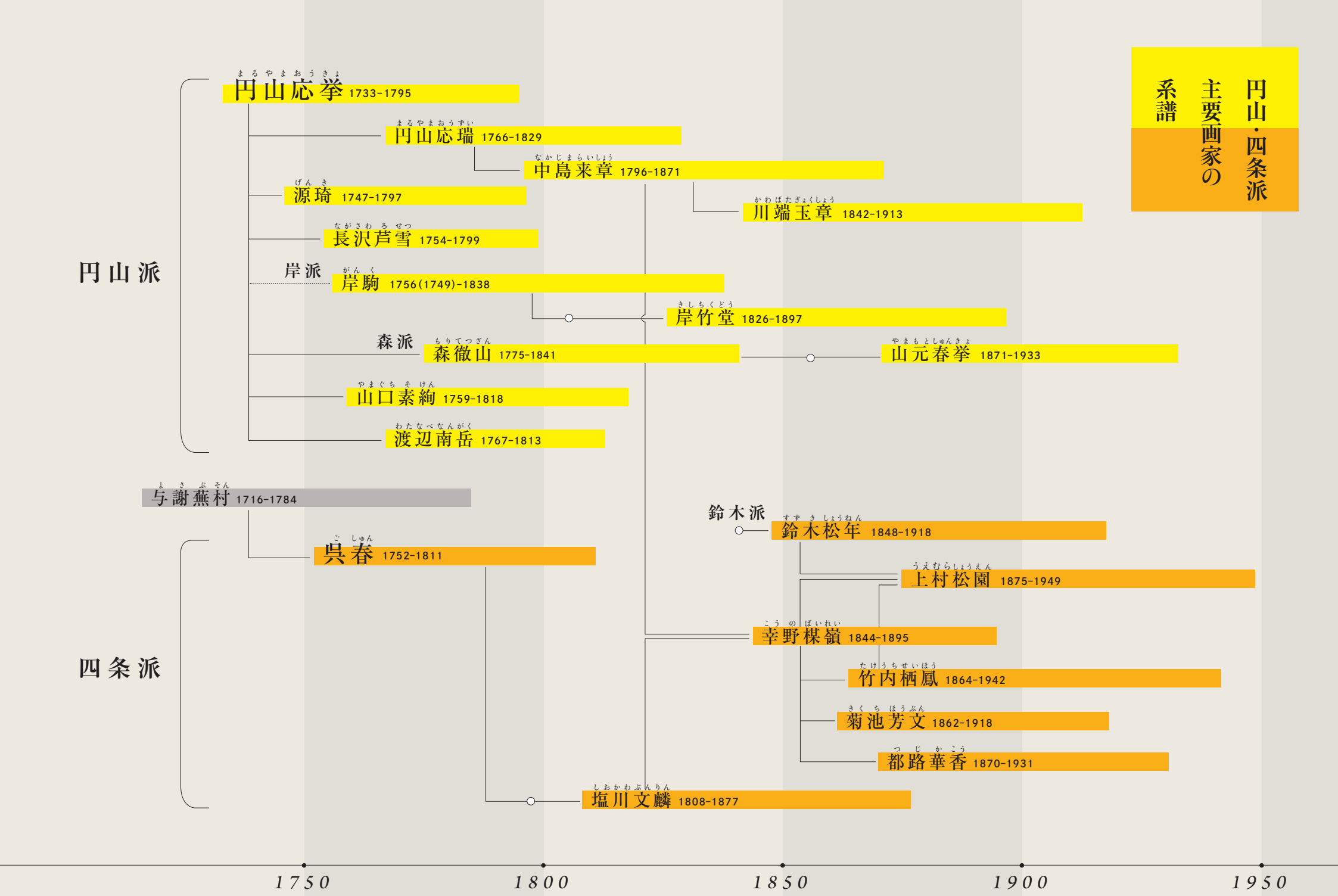
本展は、応挙、呉春を起点として、長沢芦雪、渡辺南岳、岸駒、岸竹堂、幸野楳嶺、塩川文麟、森徹山、菊池芳文、竹内栖鳳、山元春挙、上村松園ら近世から近代へと引き継がれた画家たちの系譜を、一挙にたどります。

また、自然、人物、動物といったテーマを設定することによって、その表現の特徴を丁寧に追います。日本美術史のなかで重要な位置を占める円山・四条派の系譜が、いかに近代日本画へと継承されたのか。これまでにない最大規模でその全貌に迫る、圧巻の展覧会です。

本展のみどころ

- 円山応挙から呉春、竹内栖鳳、上村松園まで。
  江戸中期から昭和初期までの
  円山・四条派が勢揃い！
- 写生画の名手・円山応挙最晩年の
  最高傑作大乗寺襖絵を
  特別展示 東京では約10年ぶり！ 京都では約24年ぶり！
- **重要文化財12件を含む** ※東西併せて
  約120件の名品を一挙紹介

円山・四条派 主要画家の系譜



すべては応挙にはじまる。

重要文化財

円山応挙
「写生図巻（甲巻）」（部分）
明和８年〜安永元年（1771-72）
株式会社 千總蔵

東京展：後期展示
京都展：半期展示

画像1

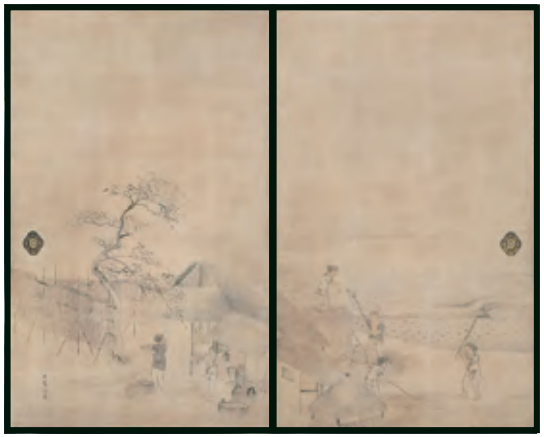
重要文化財

円山応挙
「写生図巻（乙巻）」（部分）
明和７年〜安永元年（1770-72）
株式会社 千總蔵

東京展：前期展示
京都展：半期展示

画像2

自然や花鳥、動物を生き生きと写し取った斬新な応挙の画風は、たちまち京都で評判となった。63歳の生涯を閉じたときには、息子の応瑞をはじめとして源琦、山口素絢、渡辺南岳ら多くの門弟たちが育っていた。奇想の画家と称せられる長沢芦雪もそのひとりである。また、与謝蕪村の高弟だった呉春も晩年の応挙に弟子入りを乞うが、応挙は親友として迎え入れたと伝えられる。呉春は南画と写生画とを融合した画風で四条派と呼ばれるようになり、円山派と四条派はその後の京都画壇の中心を成していった。そして派生的に生まれた原派、岸派、森派、鈴木派など多くの画系が複雑に絡みながら近代の京都画壇へと引き継がれていった。



重要文化財

呉春
「四季耕作図」
寛政７年（1795）
兵庫・大乗寺蔵

東京展のみ
通期展示

重要文化財

円山応挙
「松に孔雀図」
寛政７年(1795)
兵庫・大乗寺蔵

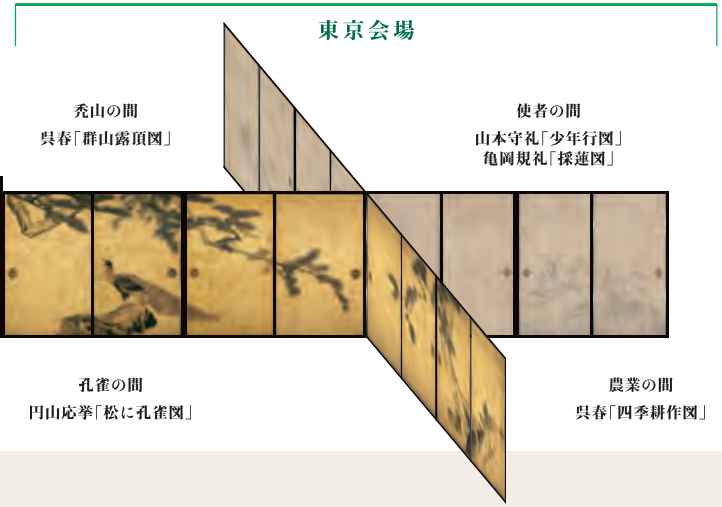
東京展のみ
通期展示

画像 3

特別展示 大乗寺障壁画

重要文化財の襖絵群を再現展示

大乗寺客殿各室の雰囲気をそのままに体感できる贅沢な立体的展示を実現。



重要文化財

円山応挙「松に孔雀図」

寛政７年(1795)
兵庫・大乗寺蔵

京都展のみ
通期展示

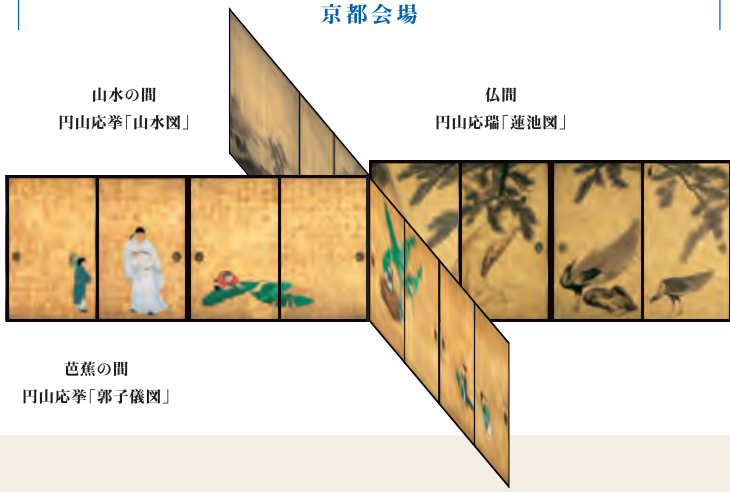
画像 4

兵庫県の日本海側にある香美町にある大乗寺は、一名を応挙寺という。１７８７(天明７)年、応挙は同寺と障壁画制作の契約を交わすと、客殿各室の全体構成を考え、一門を率いてこれにあたった。応挙は最初に山水の間、芭蕉の間(郭子儀図)を描き、亡くなる年(１７９５年)に孔雀の間を描く。応挙自身が大乗寺を訪れたという記録はなく、京都の画室で制作したものを弟子たちに委ねたものと考えられている。本展では、「松に孔雀図」「郭子儀図」など客殿の応挙作品を中心に再現展示することによって、応瑞、呉春、山本守礼など円山・四条派の系譜を合わせて立体的に鑑賞することができる。

兵庫県北部、山陰海岸国立公園を臨む大乗寺。

客殿には、応挙をはじめ息子や門人たち総勢14名が揮毫した165面の障壁画が収められ、いつの頃からか、「応挙寺」と呼ばれ親しまれています。

京都会場



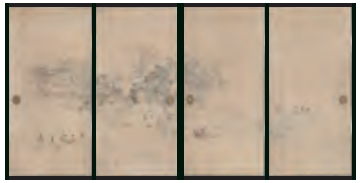
重要文化財

円山応挙
「郭子儀図」
天明8年(1788)
兵庫・大乗寺蔵

京都展のみ
通期展示

画像 5

東京展のみ：通期展示



重要文化財

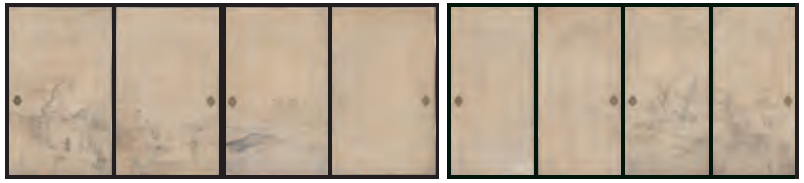
亀岡規礼
「採蓮図」

重要文化財

山本守礼
「少年行図」

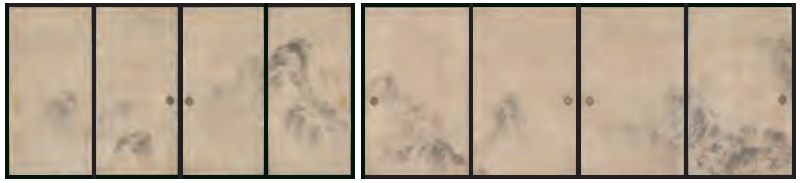
重要文化財

円山応挙
「松に孔雀図」
寛政7年(1795)



重要文化財

呉春
「四季耕作図」
寛政7年(1795)



重要文化財

呉春
「群山露頂図」
天明7年(1787)

重要文化財

円山応挙「郭子儀図」

天明8年(1788)
兵庫・大乗寺蔵

京都展のみ
通期展示

画像6

京都展のみ：通期展示

重要文化財

円山応瑞「蓮池図」

重要文化財

円山応挙「松に孔雀図」
寛政7年(1795)

重要文化財

円山応挙「山水図」
天明7年(1787)

重要文化財

円山応挙「郭子儀図」
天明8年(1788)

山、川、滝。自然を写す。

重要文化財

円山応挙
「保津川図」
寛政７年(1795)　株式会社 千總蔵

画像 7

東京展：後期展示　京都展：半期展示

応挙の登場までは、絵画の基本はやまと絵か中国画だった。そこでは、自然を描くといっても、現実とは違った名所絵の世界か、見たこともない山水世界が描かれてきた。応挙は、まず実際の場所を好んで描き、さらにその場に立って観た時の臨場感までをも写し出そうと試みた。保津川や嵐山などの画題は、その後、円山・四条派の系譜で繰り返し取り上げられている。また、遠近法を踏まえて見えた通りに描こうとする表現方法は山水画というよりも風景画に通じる側面があり、円山・四条派の作風はより自然なかたちで近代絵画へと変化していった。

菊池芳文

「小雨ふる吉野」

大正３年(1914)　東京国立近代美術館蔵　京都展のみ：半期展示

画像 8

美人、仙人。物語を紡ぐ。

重要美術品

円山応挙
「江口君図」

寛政６年(1794)
静嘉堂文庫美術館蔵

東京展のみ：前期展示

画像 9

応挙が美人画にも新生面を拓いたことは意外に知られていない。唐美人と呼ばれる中国の貴婦人を描く伝統を踏まえたものだが、狩野派や南画系の画家たちとは一線を画した温和で品格ある女性表現を生み出した。また、古くから画題としてきた仙人や、物語の登場人物を描く人物画はその後の円山・四条派でも盛んに描かれている。近代になるとジャンルとしての人物画の評価が高まるが、東京画壇で歴史画が隆盛したのに対して京都画壇では自然や動物が根強い人気を保った。その中で、上村松園が近代美人画の世界を確立した意義は大きいが、それは応挙の美人画に端を発する長い伝統に位置づけられるものだった。

呉春
「山中採薬図」

公益財団法人阪急文化財団
逸翁美術館蔵

東京展：前期展示
京都展：半期展示

画像 11

上村松園
「楚蓮香之図」

大正13年頃（c.1924）
京都国立近代美術館蔵

東京展：後期展示
京都展：半期展示

画像 10

孔雀、虎、犬。命を描く。

重要文化財

円山応挙
「牡丹孔雀図」
明和8年(1771)　京都・相国寺蔵

京都展のみ：半期展示

画像12

鳳凰や龍といった架空の動物よりも、孔雀や鶴、虎、犬、猿、鹿など生きた鳥や動物たちをよく観察して描こうとした応挙。鳥の羽根の一枚、動物の毛の一本までも写し取ろうとしたその作画態度は弟子たちに引き継がれ、猿を得意とする森派、虎を得意とする岸派などが人気を博した。いずれも、生き生きとした動きのある姿に描こうとする「写生」に徹したところに特徴があり、その伝統は近代になっても京都画壇の重要な特性として受け継がれていった。近代画家たちは応挙以来の写生に西洋的な写実画法を加味して新たな表現を生み出したが、竹内栖鳳はさらに簡素で洒脱なスタイルを確立し一世を風靡した。

都路華香
「雪中鷲図」
明治34年(1901)
個人蔵

東京展：前期展示
京都展：半期展示

岸竹堂
「猛虎図」

明治23年(1890)
株式会社 千總蔵

東京展：前期展示
京都展：半期展示

画像14

長沢芦雪
「薔薇蝶狗子図」

寛政後期頃(c.1794–99)
愛知県美術館蔵(木村定三コレクション)

東京展：前期展示
京都展：半期展示

画像13

竹内栖鳳
「春暖」

昭和5年(1930)
愛知県美術館蔵
(木村定三コレクション)

東京展：前期展示
京都展：半期展示

画像16

円山応挙
「狗子図」

安永7年(1778)
敦賀市立博物館蔵

東京展：後期展示
京都展：半期展示

画像15

円山応挙から近代京都画壇へ

Legendary Kyoto Painting from Maruyama Okyo to the Modern Era

東京展

会場　東京藝術大学大学美術館
東京都台東区上野公園12-8　電話03-5777-8600（ハローダイヤル）

会期　2019年8月3日（土）～9月29日（日）　50日間
前期：9月1日（日）まで　後期：9月3日（火）から

休館日　毎週月曜日（祝日又は振替休日の場合は開館、翌日休館）

開館時間　午前10時～午後5時（入館は閉館の30分前まで）

主催　東京藝術大学、朝日新聞社

後援　台東区

協賛　岡村印刷工業

観覧料

	当日	前売り	団体
一般	1500円	1300円	1200円
高校・大学生	1000円	800円	700円

中学生以下無料

京都展

会場　京都国立近代美術館
京都市左京区岡崎円勝寺町　電話075-761-4111

会期　2019年11月2日（土）～12月15日（日）　38日間
前期：11月24日（日）まで　後期：11月26日（火）から

休館日　毎週月曜日（祝日の場合は翌日休館）

開館時間　午前9時30分～午後5時（金曜・土曜日は午後8時まで）入館は閉館の30分前まで

主催　京都国立近代美術館、朝日新聞社、京都新聞、NHK京都放送局

協賛　岡村印刷工業、JR西日本

東京展・京都展とも前期後期で大展示替え！

※ただし、大乗寺襖絵は通期展示

展覧会公式サイト
https://okyokindai2019.exhibit.jp/

報道関係お問い合わせ
「円山応挙から近代京都画壇へ」広報事務局
（共同PR内　担当：三井、佐瀬）
電話03-3571-5363
FAX 0120-653-545
メール okyokindai2019-pr@kyodo-pr.co.jp